



# 虹のかけ橋

\* \* \* \* \* \* \* \* 第39号/平成27年9月

兵庫県立但馬やまびこの郷

<http://www.t-yamabiko.asago.hyogo.jp/>

## 段階に応じた援助を ～学校復帰を援助する関わり方～

不登校のきっかけはさまざまですが、ほとんどのケースがほぼ同じような「段階」をたどって学校復帰に向かうといわれています。段階により子どもたちの状態は変わっていきますので、それぞれの「段階」に対応した関わりにより、学校復帰を援助することができると言えます。ここでは、学校として有効と考えられる関わり方を取り上げます。

### ① 前兆期（孤立緩和）

- ・気になる様子に気づいたら、声かけを（一人で悩んでいるという孤立状態にしない。早期発見、早期対応で未然防止を）

### ② 初期（心身の安定を図る）

- ・登校しないことに対して非難したり、学校へ来るよう強制したりしない（登校できないことに本人が一番苦しんでいる）
- ・迎え、訪問、電話などは本人が嫌がる場合は控える（必ず事前に確認を）

### ③ 中期（エネルギーをためさせる）

- ・進路や学習の情報を上手に提供する（登校していないなくても、学校のことは常に気がかり。軽く、さりげなく伝える。本人が拒否的ならすぐにやめる）
- ・状況打開の見通しと希望を上手に与える（見通しと希望があれば前進できる。進級・進学、学習の遅れなどについての打開策を伝える）
- ・つながりを切らない  
(本人に気持ちを伝える。本人に会えなくても、家庭訪問で保護者とつながる)

### ④ 後期（活動への援助）

- ・進路、学習、就職などの情報を具体的に提供する  
(試験、進路説明会、オープンハイスクールなど)
- ・受入れの態勢づくりをする  
(本人や両親の意向を十分に聞いて配慮する。スマールステップで提案)

### ⑤ 学校復帰後（見守る）

- ・継続して見守る

登校刺激は、してはいけない時もありますが、しなくてはいけない時もあります。その時のポイントが3つあります。

- 1 小出しにする（軽い話題から入る）
- 2 まずいときはすぐに提案を引っ込める（つらそうならすぐに打ち切る）
- 3 効果は翌日確かめる（家族に電話して結果の良し悪しを確認する）

本人の意思を確認しながら、受入態勢を整えたり、ここぞという時に押したりするなど、適切なタイミングを逃さないようにしたいものです。



# 三者が連携した支援の効果

## ～当所利用者への追跡調査の結果から～

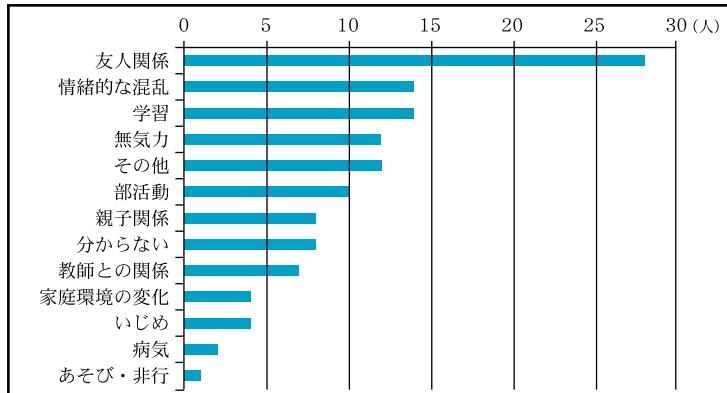
平成25年度の宿泊体験利用者にアンケートを実施しました。在籍校の教職員、並びに保護者に対して、効果のあった関わりや利用後の変化などについて尋ね、望ましい支援のあり方を検討しました。

調査の結果、学校、家庭、但馬やまびこの郷が連携し、点ではなく一本の線として子どもたちを支援する重要性が明らかになりました。

### 1 不登校のきっかけ

登校しにくくなったきっかけについては、毎年行われる学校基本調査の学校用アンケートでは、情緒的な混乱や無気力など「本人」に起因するものが多くなっています。

しかし、当所アンケートでは、「友人関係（いじめを除く）」が圧倒的に多く、人間関係のつまずきから登校しづらくなった状況が伺えます。[図1]

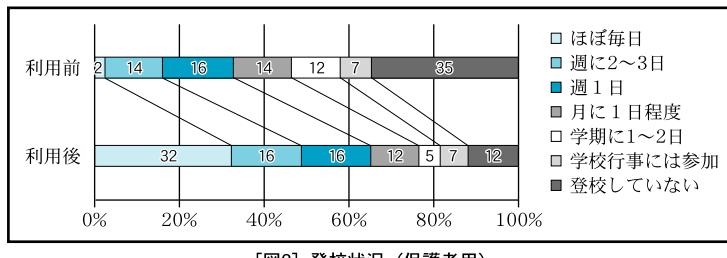


[図1] 登校しにくくなったきっかけ

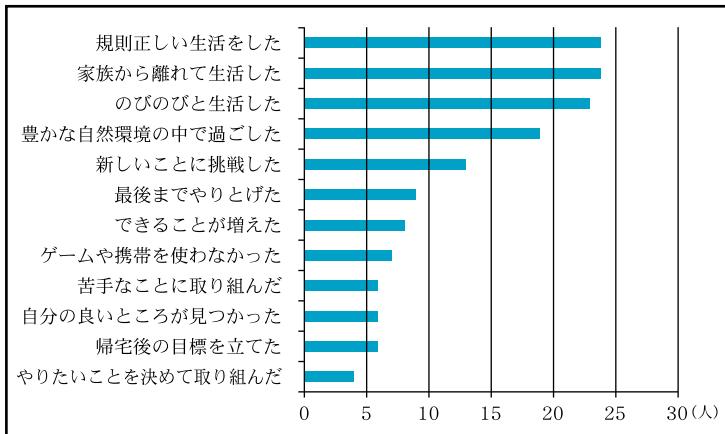
### 2 改善に効果のあった働きかけ

当初利用前は、ほぼ毎日登校している割合が、保護者用アンケートでは2%でしたが、利用後においては、32%と増加しています。[図2]

子どもたちへの効果的な関わりとして、当所・学校・家庭それぞれの支援の有効性を見てみました。



[図2] 登校状況（保護者用）



[図3] 当所の関わりの有効性（保護者用）

### 生活環境を変える

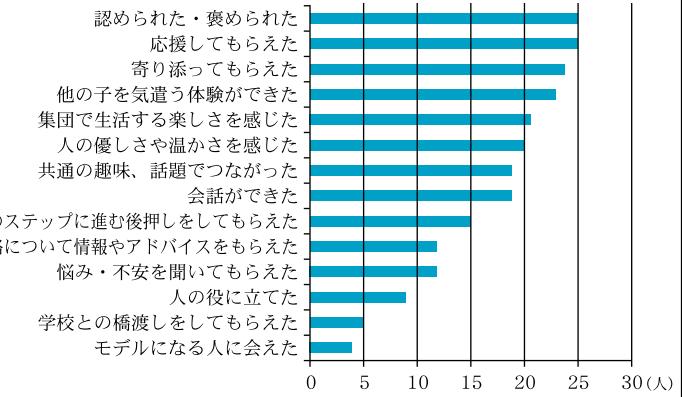
宿泊生活や体験活動に関する項目では、「規則正しい生活」や「のびのびと生活」したことがあげられます。「家族と離れて生活」も上位にきており、豊かな自然環境の中で集団生活を通して自立した生活を行うこと、また「新しいことへの挑戦」や「やりたいことへの取組」「苦手なことへの取組」を仲間とともに行ったことが、有効に機能していると思われます。[図3]

### 人との関わりが変化をもたらす

人とのつながりに関する項目でみてみると「認められた・褒められた」「応援してもらえた」「寄り添ってもらえた」など、自分を認めてもらう体験や、「人の優しさや温かさを感じた」「悩み・不安を聞いても

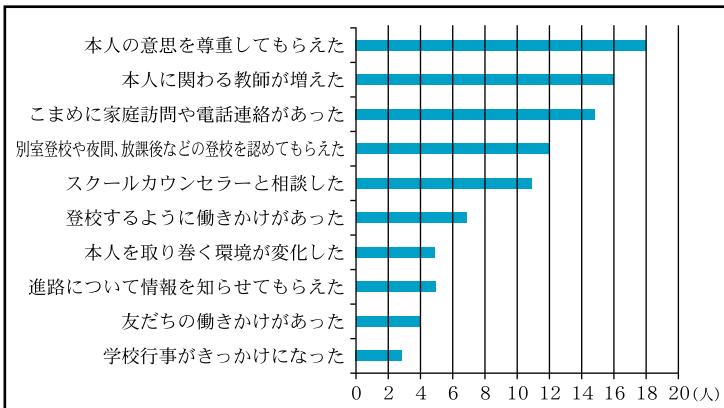
らえた」など、自分が優しくしてもらう経験をすることで人と関わるエネルギーが蓄えられたことが伺えます。

そして、「他の子を気遣う」ことや「人の役に立つ」ことなどが自己有用感につながったと考えられます。  
[図4]



[図4] 当所での人との関わりの有効性（保護者用）

## 教師の熱意は伝わる

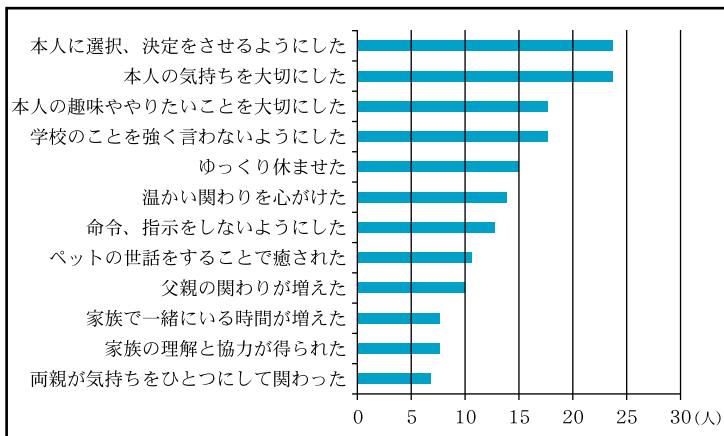


[図5] 学校からの関わりの有効性（保護者用）

学校からの効果的な関わりとして、「本人の意思を尊重してもらえた」が上位にきいています。本人の気持ちを確認したうえで学校から様々な働きかけがされることで、安心して次の一步に踏み出すことができると思われます。

また、「本人に関わる教師が増えた」「別室登校や放課後登校等を認めてもらえた」などの柔軟な対応により安定した登校に結びついたことが伺えます。  
[図5]

## 自己選択・自己決定の力をつけさせる



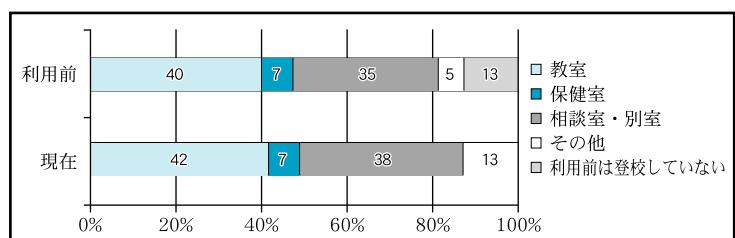
[図6] 家庭の関わりの有効性（保護者用）

家庭での効果的な関わりとしては、まずは学校のことから離れてしっかり休養をさせること、そして家族が本人の状態を理解することで安定を図ります。その上で、「本人の気持ちを大切にした」「本人のやりたいことを大切にした」「本人に選択、決定させるようにした」など、寄り添いながらも本人の意思を尊重し自分で選んで自分で決めさせて、状態が改善したことが伺えます。  
[図6]

## ③ 柔軟な対応で学校復帰に導く

登校後の主な居場所については、利用前に相談室や別室を利用していた割合が35%から38%に、また教室に向けての動きも微増しています。本人の意向を尊重して夜間や放課後、別室登校などの段階を追った学校の柔軟な対応により、多くの児童生徒が当所の利用後に学校復帰に向けて動き始めていることが分かります。

今後も、学校・家庭・当所が連携し、一本の線で結ばれた支援を行うことが重要だと考えます。  
[図7]



[図7] 登校後の主な居場所

# 但馬やまびこの郷との連携で学校復帰を目指す

## 当所利用児童生徒の学校から

- ・やまびこの郷での活動によって、本人が自信を持つことができました。家庭訪問で会えなかつたのが、やまびこの郷での活動後、顔を合わせて話ができるようになりました。
- ・家で過ごすことが多いので、やまびこの郷ではしっかりと体を動かし、人と接するよい機会になっています。
- ・不登校の改善という面では難しいですが、本人にとってやまびこの郷は大変有意義な時間であり、外へ出ることに対して少しずつ自信をつけているように思います。
- ・やまびこの郷に行くことを本当に楽しみしていました。新しい友人もでき、充実した日々を過ごせていたと思います。
- ・やや昼夜逆転の生活になりかけていましたが、規則正しい生活ができました。もともと明るい子でしたが、ますます表情が豊かになりました。
- ・現在は他の生徒同様の学校生活が送っています。友人とも関わりを持ち、話をしたり遊んだり、勉強したりすることができるようになりました。何事にも積極的になってきました。教職員ともコミュニケーションが取れるようになりました、笑顔も増えました。

家から一步踏み出し、豊かな自然環境の中で人や地域とふれ合う体験が子どもたちの心のエネルギーをため、次の一步を踏み出す力になっていると感じています。

ぜひ、但馬やまびこの郷を支援策の選択肢の一つとして捉え、学校の支援計画に入れていたくことを願っています。まずはHPをご覧ください。



## 目標を持って一步踏み出す

当所では、学校復帰の支援を目指し、宿泊体験の最終日に目標を立てるようにしています。1家庭生活、2学習、3学校（適応教室）の3項目について「少し頑張ったらできることは何か」という視点で考えるように促します。目標が少し高すぎると思われるときには、スタッフと相談して立て直すこともあります。目標がなかなか決まらないときには、いくつか選択肢を示した中から子どもが選ぶこともあります。

学校復帰の目標を立てる場合には、右記の『チャレンジ登校プラン』を基に相談することもあります。「教室は難しいけど別室ならがんばれるかも」「理科は得意なので、実験の授業に出てみたい」「友だちに会うのはまだ抵抗があるので、放課後に登校できたら」など、学校復帰に向けての思いや悩みは一人一人違います。その違いを捉え、個に応じた支援をすることが、学校復帰への第一歩につながります。

### チャレンジ登校プラン

- 1 期間
- 2 登校する日
- 3 登校する時間
- 4 過ごす場所（部屋）
- 5 学校でできそうなこと  
(選択肢を示す)
- 6 行ってみる場所（部屋）
- 7 会ってみる人
- 8 感想（チャレンジ後）